「なん…だって？」

銀さんは思わずベンチから立ち上がった。

「何故だ？　どこが悪いんだ？　病名は！？」
「ＣＡＥＢＶ。あちらでやった精密検査で判かりました」

九十九は、また煙草をくゆらせた。

「ＣＡ…なんだ、そりゃ」

舌をもつれさせながら銀さんがまた聞いた。

「慢性活動性エプスタイン・バールウィルス感染症。平たく言えばヘルペスです」
「ヘルペスって、あの口の周りやらに出来るブツブツの病気か？」
「えぇ」
「そんなもんで坊やが死んじまうってのか！」

上から怒鳴りつけるように銀さんが叫ぶ。

風が流れた。

九十九が顔をあげ銀さんを見た。

「ＥＢウィルスはガンマヘルペスウィルス亜科に属し、通常はヒトＢ細胞へ感染，リンパ球を攻撃します。伝染性単核症の病原体として、たいていは幼少期に経口感染、そのまま長期間体内に潜伏します。普通なら大した事にはなりません、ちょっと重めの風邪程度です。普通なら、ね」
「確かに坊やは普通じゃない。普通じゃないが…」
「そういう意味ではないんです。私達はＥＢウィルスを、常在菌と同様に体内に住まわせています。普通の人間にはＥＢウィルスに対する抗体があるんです。でも、ごくまれに抗体を持たないで生まれてくる者がいる。彼がそうなのです」

そこまで言うと、九十九は２本目の煙草を催促した。
銀さんは、今度は黙って火を差し出した。

「だが…だがよ、たかがヘルペスじゃねえか。なんか治療法があんだろ！」
「ありません」
「お前、精神科じゃねぇか！　もっとよぉ、もっと詳しい腕のいい医者だっているだろ！」
「精神科医だって医者の端くれですよ。ＣＡＥＢＶは極めて発症例の少ない病気です。研究も進んでいない、治療法さえ殆ど確立されていません。お手上げなんですよ、今の医学では」
「…」
「彼はずっと入退院を繰り返してきました。生まれつき身体が弱いというのは、ＣＡＥＢＶでは致命的です。循環器、消化器、呼吸器、全てが壊れてゆく。３つ以上でＭＯＦ（多臓器不全）、６つ壊れれば、もう…」
「やめろっ！！」

銀さんの拳が、ベンチの背もたれを叩き割った。
飛んだ血が九十九の頬に付き、涙のように垂れ落ちた。

◇

「あなた…」
「うん…」
恒彦と紗季子は、リビングで頭を抱えていた。

加夏子が姿を消した時は誘拐かと狼狽したが、病院からは開放療法という治療の一環で同行者付きの小旅行だと聞かされ、親の了解も無く連れ出した事に腹を立てつつも納得した。
２週間近く待たされ我慢の限界にきた頃、主治医の九十九に伴われふらりと帰ってきた娘の姿を見て二人は狂喜した。

立っている。
歩いている。

杖をついてはいたが、間違いなく加夏子は自力で歩行していた。２年ぶりの立ち姿だった。
連絡がなかった事も忘れ、二人はそれこそ涙を流して喜んだものだ。
だが。

加夏子の様子が変だった。
以前のように凶暴になったり、捨てばちな虚無感を漂わせたりという訳ではない。
じっと考え込んだり、部屋に籠もる時間がいやに長くなった。
広島でのことは、聞いてもあいまいにはぐらかすばかりで話そうとはしなかった。

病院からは、予後のケアも含め引き続き通院を続けるよう言われていたが、今の加夏子の様子は、二人には病気でなく何か違うものだと思えてならなかった。

「カナちゃん、何かすごく悩んでいるみたい」

テーブルに水割りを置きながら紗季子が言った。

「あぁ。だが何も言ってくれない。前はなんでも話してくれたじゃないか、そうだろ？」
「えぇ、そうね。でも考えたの。あのコもう１８よ。親に話せない悩みがあったって不思議じゃない。今までいい子過ぎたのよ。私達、それが当たり前だと思い込んでた」
「そうかなぁ～」
「そうよ」
「ならどうすりゃいい！」

ヤケクソのように言い、恒彦は水割りを飲み干すとグラスをテーブルへ叩きつけた。

「…私、話してみます」
「話す気のない相手だぞ、こっちがいくらくっちゃべっても無駄だ」
「自分の娘よ、悩みがあるなら聞いてあげるのが親じゃない？」
「甘いぞサキ、人間なんてそんなもんだ。娘だろうと誰だろうと、隠しておきたい事をベラベラ喋る奴なんていない」

恒彦は断言した。

「商談じゃないのよ、あなた。大事な娘のことなのよ」

「しかし…」
「私を口説いたとき、そんな事考えてた？」

紗季子がニッコリと笑った。
その時、階段を降りる音が聞こえてきた。

「どうした、もうすぐ晩ご飯だぞ」
「ちょっと散歩してくるね」

伏せ目がちに告げ、加夏子は立ち止まらずに玄関へと歩いていった。

「あなた」
「…」

紗季子に促されても、恒彦は腰を上げられずソファーでもぞもぞしていた。

「いい、私が聞きます」

しびれを切らした紗季子が玄関へ向かおうとした時、がばっと恒彦が立ち上がった。

「わたしがいく」

紗季子を制すると、大股でリビングを出ていった。
残された紗季子は、困ったような顔で微笑んでいた。

◇

「か、カナ。もう日が落ちる、散歩はやめといたらどうだ？」
「なに、パパ？　どしたの」
「あ、いや、歩くのは…アレだ、訓練になっていい事だ」
「ならいいじゃん」
「そうだな、いいコトだ、はっ、ハハハハハッ！」

小首を傾げた加夏子は、靴を履き終わると杖を手に玄関を出ようとした。

「待て！　待ってくれ！」
「だから、なに？」

やおら胡座をかくと、両膝に手を当てて恒彦は娘を睨んだ。

「…あたし、何かわるいことしちゃった？」

恒彦の迫力に押された加夏子は、訳がわからないまま小声で聞いた。

「あぁ、したとも！！　パパはなぁ…ママもだが、お前が心配なんだ。帰ってきてからずっと、お前は悩んでいるようだった。パパは怖くて聞けなかった。スマン」

恒彦は深々と頭を下げた。

「無理には聞かん、だがな、自分一人でどうにもならない悩みなら、パパやママに手助けさせてくれないか？　怒りゃしない、責めたりもしない、みんなで一緒に考えよう、な？」

恒彦の巨体が、すがりつくように加夏子を見上げた。

「…パパ」
「なんだ？」
「優子ママが死んじゃった時、パパは悲しかった？」

思いもかけない問いに恒彦は絶句した。
清水優子。加夏子の実の母であり、病死した恒彦の前妻の名前だった。
紗季子が後妻に入った頃、よく加夏子が口にした言葉。
もうしばらく聞いていなかった言葉だった。

「辛かった。パパ、おぃおぃ泣いたよ。何も手につかなかった。消えてしまいたかった」
「そうだよね。消えたくなっちゃうよね」

小さく答え、加夏子は玄関を出た。
恒彦はただ見送るしかなかった。